

趣味探訪



同志社学園の中には、またその周辺には趣味人がたくさんおられる。

毎号二、三の方を訪問して趣味談をうかがうことにした。まず手近なところとして今回は三人の方々に登場していただくこととした。さらにかくれた趣味人を発掘して紙上を飾りたいと思っている。

住
谷
悦
治



本

同志社総長

——先生は非常にたくさんのお書物をお持ちになっておられますが、今日は、珍本を拝見させていたいただきながら趣味のお話を伺いたいとおもいます。まず、お集めになられた動機といますか……。

住谷 誰でも少年時代がそうであるように、私も非常に収集癖があつて、小学校で古銭を集めたり、郵便切手の交換会に入り、世界の少年達と切手の交換をしたりしましたが、中学の三年か四年でやめてしまった。中学の時は植物採集、鉱物採集などをしたんですが、これもまた続かなかつた。そして、大学を出てから、社会科学を勉強するようになって、どうせなら、専門の社会思想に関するものを明治から集めよう、また、文学も好きだから明治時代のもを集めようという気になったそれで、古本屋歩きをしてはそういう方面の本を集める気になったんです。それが私の収集でいまも多少続いているんです。それは、今の勉強と関係あるから……。小説では、特に夏目漱石、二葉亭四迷、森鷗外などを集めました。漱石のものはほとんど初版本を持っています。

——そうしますと、経済の方は、先生の専門



「金色夜叉」のさし絵



「当世書生気質」

のかたちでお集めになったし、もう一つは、小説とか文芸などは趣味でお集めになったということですね。

住谷 そうですね。今でもそうですが、二つが車の両輪のようなものですね。

——趣味である文学の中から特に面白い本がありましたら二、三……。

住谷 文学でおもしろいと思うのは、尾崎紅葉の「金色夜叉」の古本で、いつ頃集めたのかわかりませんが、その第一巻にはさし絵があつて大変おもしろいですね。それから、二葉亭四迷の「浮雲」。坪内逍遙の「当世書生気質」。これは和本ですが、明治の始めの頃の空気がよく出ていますね。それに、島崎藤村の「若菜集」などを手に入れて喜んでたものです。

——この「当世書生気質」はどこでお求めになったのですか。

住谷 神田で。

——東京で？

住谷 ええ、大学を終わるころ、大正十一年頃ですかね。

——当時でいくら位したものでしたか。
住谷 私の記憶では五十銭ぐらいだった。そ

れから後は京都へ来て、京都の古本屋で社会主義の本を集めたんです。

——珍しいものを見つけた時の喜びというのは……。

住谷 それはとても嬉しいですね。

——先生は趣味が豊かで、本以外にも、絵画や陶器もお集めになっていらっしゃるし

住谷 収集癖ですね。仕方ないですね、これは。収集癖はある程度満足させないと承知しないからね（笑）。

——先生は専門と趣味とが一致していますからよろしいですね。

住谷 そうですね。専門と結びつけてみることでできますからね。

——どうもいい本をたくさん見せていただきまして、ありがとうございます。

*

住谷総長所蔵稀刊本の一部

(一)「当世書生気質」 春のやおぼろ先生戯著

(坪内逍遙著)

明治十八年五月刊 晩青堂出版

(二)「文明論之概略」全六巻 福沢諭吉著

明治八年刊

(三)「真政大意」二冊

加藤弘之著

明治三年刊

(四)「魯西国

虚無党冤枉乃鞭笞、全」内藤久人編輯

明治十五年刊 駿々堂書店

(五)「金色夜叉」五卷

紅葉山人

(尾崎紅葉著)

明治三十一年刊 春陽堂出版

(六)「浮雲」春の屋主人、二葉亭四迷合著

明治二十四年刊

(七)「みだれ髪」

与謝野昌子著

明治三十七年刊 藤島武二画

等々、その他数え切れない程の稀刊本を所蔵されて、一々の書物についての「思い出」とその大様を解説していただいた。

時間の過ぎるのも忘れて、先生の話に耳を傾け、宅を辞した時には初秋の夕暮れが静かに下鴨の街並を包みかけていた。

*

秦 孝治 郎



同志社理事長

陶 器

——今日は理事長のご趣味である陶器についてお話を伺いたいと思いますが、興味をお持ちになったきっかけなどから……。

秦 最初は私の郷里の水口の友人からもらった朝鮮の陶器（今から考えると模造品だったのですが）を持っていたんですが、その当時

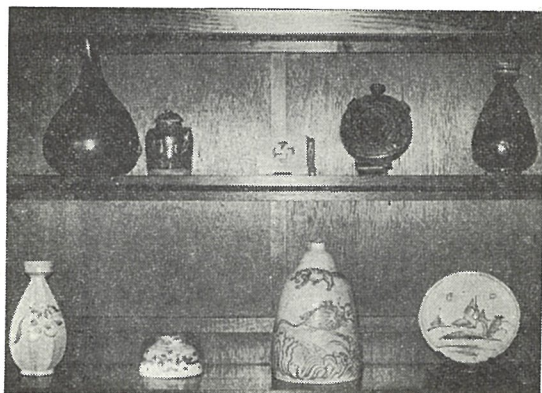
高橋という、朝鮮で成功した人が李朝の白磁をくれたんです。そうすると、この二つを見ていると本物がいかにかいいか、そういうものに魅せられて、それでは少し集めようかというのから始まったわけです。

それで九州へ行ったときなど大分買ったのですが、今からみると幼稚で、家内なんかはそういうものを賞美しないで、どちらかといえばけなして、家へ持って帰ってきてもあまり評判がよくなかったんです。だんだんこういったものに興味をもっていたところ、横浜に中村好弘という、今の芸大出進の画家で、陶器に相当の感心の高い方がおられまして、実はその方が、京都へ来て相当買ってくれたわけなんです。

——京都で買われたんですか。

秦 ええ、大部分京都です。なかには東京で買ったものもありますが、なんといっても京都は宝庫ですね。たとえばこの壺は李朝のもんですが、戦時中早稲田の教授が持っておいて、親戚の者が、金がいるから買ってくれというんで、確か四〇〇円位で買ったんですが、その当時では高いものでしたね。

——そうしますと、画家の中村さんという方



集められた陶器のかずかず



李朝の壺

が先生で、いろいろ指導してくださったところのことですね。

秦 ええそうです。

——理事長自身が道具屋へ行くとか、「市」で発見されたというものも……。

秦 この灰皿なんかその一つですが、これは中村先生にもほめられて、家内もこれは非常におもしろいという。ここにあるものでは、私よりも家内の方が多く集めたものがあるんですよ。また、中村先生が東京で壺を買って来てくださったときに、「こんなきたない壺、先生、しやうがないじゃないですか」といったんですが、今日になってみますと、何ともいえん、あきたない、よくれたあの壺に引かれるんですね。だから、われわれでも永年こういうものを見ておっても、こういうものの本当のところはわからんですね。

それに一つ私が理屈をつけているのは、朝鮮のものでも李朝のものなんか見ておると、民族の隔たりが感じられなくなる。陶器というものを通して、心と心のつながり、趣味のつながり、それから人間としての親善、そういうものが自然と出てきますね。そういうところがひじょうに尊いんじゃないかと思いま

すね。そういうものを見ているとひじょうに心が休まる。そういう気がします。

——奥様に一つ……。絵をおかきになっていらっしゃるとお伺いしますが……。

夫人 いや、学校にいた頃など、見るのは好きでしたが、私は大変な無器用ものですか……。

秦 最近では墨絵でスケッチなんかやっています。

夫人 油絵はおもしろいんですが、年のせいか、だんだん墨絵が多くなって……。

秦 やはり家内の趣味が子どもにいったのか、いま関東学院に行っておるのが、私の仕事をさがせようと思つて横浜の高校の建築へやったのですが、そこを卒業して、とうとう関東学院の美術の先生になって、国画会の会友かなんかで絵をかいているわけなんです。

それから娘が芸大を卒業して……。だから、金にならないものに（笑）家内の血がいつてしまつて、大変、私迷惑しているわけなんです（笑）。

——しかし、ご夫婦でいいご趣味をもつていらっしゃる。まことに結構だと思います。どうもありがとうございました。

大西善明



雅楽器・時計

論教中高女子社同志

九月中旬のある日の午後、先生の車に便乗して宅を訪れると、まず玄関には信楽の壺がでんと置いてある。玄関の床は黒い正方形の石が碁盤の目のように整然と敷かれていて、入る者をして心の折目を正してくれる。

応接室のピアノの上には、西洋の振り子時計が一对置かれてあるし、戸棚には、丹波の徳利が数本、オランダの皿、日本の「くらわ

んか」茶碗が雑然とならんでいる。

——大西さんの趣味は非常に広いようですが特に雅楽器をお集めになられた理由などについて……。

大西 私は国語の教師をやっていますので、たとえば謡曲だって、笙の笛だって、国語を教える場合に出てきます。その折に実際に知っているのと、そうでないとは随分と違いますので。

——なる程。特に「笙」についても少しお話してください。

大西 笙はメロディーを吹かないのです。ハ—モノ—を吹くのです。箏、箏も習いましたがなかなかむづかしいものです。

——こんな珍らしい雅楽器はどこでもとめられませんでしたか。なかなかないものではないかもしれませんか。

大西 以前には時折見つけましたが昨今ではなかなかありません。たとえばとても非常に高くなって、ちょっと手が出ません……。

——ここにあるこの楽器は何ですか。

大西 これは一弦器というもので、ご覧のとおり一本の弦で鳴らすものですが、非常にむづかしいものです。先生に教えてもらって

るのですが、あんたは「音痴」だといわれました。

——これはなかなかむづかしいもののようにですね。

大西 私もむづかしいと思います。須磨まで習いに行っていますが、三味線を習わないと上手にならないと思います。

——笙について思い出しますのは、新羅三郎義光の話ですが……。

大西 そうですね。鎌倉時代はずいぶん秘伝は口伝によるものが多いです。従って、自分が打ち死をしたらその後これを伝えるものがないくなる。それが惜しい、残念だということ……。

——なる程。

（笙の銘品の数々を見せていただく。さらに自ら笙を吹いて聞かせていただいた。）

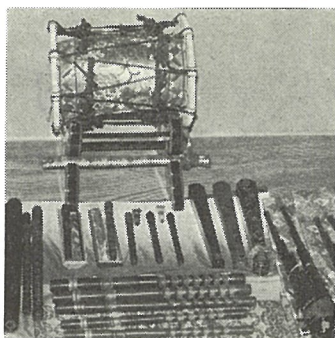
——笙を吹く人はたくさんおられますか。

大西 そうですね。たくさんというわけではありませんが、おられます。

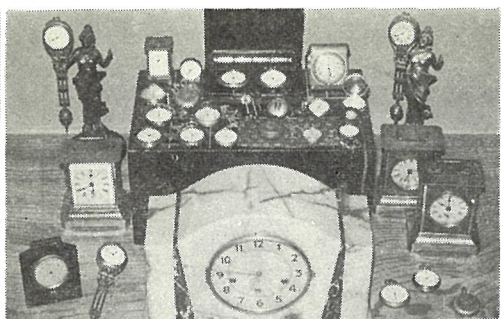
——楽譜といったようなものがあるのですか。

大西 あります。これです。

（楽譜の本をずいぶん見せていただいたが片かなやひらかなで書いてあって専門的な



(右上) 珍しい時計のかずかず



(右下) 一弦琴

(上) 雅楽器



「知識がないとなかなか判りそうにない。」

——時計もずいぶんとありますが、これはいつ頃から集められたのですか。

大西 これは最近です。

——どの位お持ちですか。

大西 二十個以上はあるでしょう。

(数多くの時計を出して見せてくださる。)

ドイツ製の時計、スイスの時計、日本の古い懐中時計等々)

——大したコレクションですね。

大西 同志社の図書館には時計に関する文献が相当に揃っているのには感心しました。借りて目下勉強しているのです。

——古い、明治時代の時計は装飾としてもなかなか捨て難いものですし、またその鳴る音が、「ポーン」と鳴ってとても余韻があつてなかなかいいものですね。

大西 そうです。これはドイツ製ですが鳴り音がなかなかよいのです。(鳴らして音を聞かせてくださる。)

——余韻(しごん)嫺嫺としてよい音色ですね。

大西 古い、昔の時計を買って来て動くようにするにはずいぶんと金をかけて直させました。

——近頃はよい時計直し屋さんがありますか

大西 ありますよ。大津の近江神宮には時計の博物館があります。私もたびたび行っているのですが、なかなか見事な時計が集めてあります。そしてあそこで時計の修理をする技術教育、訓練の学校もやっています。

私が岡山の津山の古い店で買ったこの時計はスイス製ですがひじょうに珍しいものです。

——これはなかなか珍品ですね。

大西 これは時計の本にも写真が出ていますが、舶来品です。約二四〇年ぐらい以前のものではないかと思えます。

以前に、和時計を買いたいと思ひまして、そのケースだけを買ひ求めておいたのですがさっぱり中味が手に入りませんでした。和時計はなかなか高いので……。ところがある時この話をしていたら、自分はその機械だけを持つているという人がありまして、結局その人から、その機械を譲っていただいて、修理をしましたらよく動くようになりました。

——熱心が実を結んだんですね。その熱意が天に通じたのでしょうか。